

男女共同参画推進センター 機関誌

京からあすへ Vol.7

2025年12月26日発行

発 行 京都大学男女共同参画推進センター

〒606-8303 京都市左京区吉田橋町

TEL 075-753-2437

E-mail w-shien@mail2.adm.kyoto-u.ac.jp

URL <https://www.cwr.kyoto-u.ac.jp/>

制作協力 京都通信社

デザイン 中曾根デザイン



KYOTO UNIVERSITY



京都大学男女共同参画推進センター

02 KuSuKuアカデミックプログラム
わたしたちの〈ワクワク〉、
届け!

子どもたちに伝えさずける、
夢中を見つけるヒント

08 未来に贈るきらめくバトン
研究者インタビュー

高木佐保(白眉センター／人と社会の未来研究院)
阿毛香絵(アジア・アフリカ地域研究研究科)
邊見由美(フィールド科学教育研究センター)

14 みちみちて一歩
卒業生インタビュー

平松紘実(平松サリー)
近藤和歌子
岸畑聖月

20 拝啓、「夢中」の深みから

21 ジェンダーで読む 物語のお約束
22 わたしの味方、わたしの見方

KuSuKu
アカデミック
プログラム

わたしたちの 〈ワクワク〉、 届け!

子どもたちに伝えさずける、
夢中を見つけるヒント

京都大学の育児支援の充実を目的に開設された京都大学キッズコミュニティ「KuSuKu」。KuSuKuが提供する「京大ならでは」の企画が「アカデミックプログラム」だ。講師を務めるのは、おもに京大の研究者や元教員の方がた。学問のワクワク感や、ものごとをつきつめて探究するおもしろさを子どもたちにも体感してもらおうと、趣向を凝らしたプログラムが展開されている。それを見て「私たちもやってみたい!」と、講師役に手を挙げた学生たちの挑戦の過程を追いかけた



アカデミック
プログラム

看護師さんってどんな人? 看護師さん体験をしてみよう

体験が「わかった！」を連れてくる。
看護師の卵が届ける、看護の原点「思いやり」

この日の講師は小児看護学を学ぶ3人の学生たち。ゼミの担当教員が実施したプログラムに、助手として手伝いをしたこときっかけに、「私たちもやってみたい！」と直談判。90分間とぎれずに、子どもたちの興味をひきつけられるようにと、試行錯誤を重ねた。伝えたい気持ちがあふれ、草案は90分にはとうてい収まりきらなかったという。「楽しんでもらうことはもちろん、実体験から生まれた『わかった！』をもち帰ってほしい。『わかった！』という体感は、頭で

納得するよりも強い思い出になるはずです」(長谷川さん)。

たくさん問い合わせて、 想像する余白をつくる

参加者は、小学校低学年を中心に約15名。KuSuKuに行く予定ではなかったのに、プログラムを見て「おもしろそう」とやってきた子も。ミニホールは、これから始まる体験への期待でいっぱい。ワクワクを隠せない子どもたちに向けて、まず3人が問い合わせたの

元気 チェック

プログラムの目玉は、「元気チェック」。患者さんの健康状態を知る重要な技術「バイタルサイン測定」の一部を体験する

は、「看護師ってどんな仕事？」。「3人で共にしたのは、『一方的に話すばかりの時間をつくらない』というルール」(本岡さん)。「こまめに問い合わせたり、クイズ形式にしたり、子どもたちの反応をきちんと受け止めて返す、双方向の場づくりを心がけました」(岸さん)。

看護師の仕事に息づく「思いやり」。 ふだんの暮らしにも……

「看護師は、医師の手伝いをする人、という印象が強い。最初の問い合わせでも、そう回答

体温測定

参加者同士でペアになり、患者役と看護師役とに分かれて体温測定。「うまく測れない！」と嘆く子には、体温計の角度を変えるように促し、寄り添いながら「なぜ？」を解決

脈拍測定

脈拍測定では、数えている途中に脈を見失う子が続出。体験してはじめてわかるむずかしさに戸惑う声に、「私たちも最初はうまくできなくて、たくさん練習したんだよ」と伝える姿が印象的



聴診器や血圧計など、実際の測定機器に興味津々の子どもたち



長谷川美夏さん
医学研究科 人間健康科学系専攻
修士1回生



本岡春花さん
医学部
人間健康科学科4回生



岸花音さん
医学部
人間健康科学科4回生

て子どもたちに届ける。「みんなも、お友だちが悲しそうなときにどんな声をかけようかと、いっぱい考えるよね」。「看護とは〈相手の気持ちを汲むこと〉。ここをいちばん届けたくて、プログラムのあちこちにエッセンスを忍ばせているんです」(長谷川さん)。

• • • •

プログラム終了後、子どもたちから飛び出したのは「心のケアも大切な仕事だとわかった」という感想。「響いていたんだ！」と、目を見開いて喜びと驚きを表現する3人の姿はプログラムの大成功を物語っていた。

実施日:2025年9月21日(日)

「宇宙が好き！」を引力に世界をひろげる体験を

●天文アウトリーチ学生団体あすちか

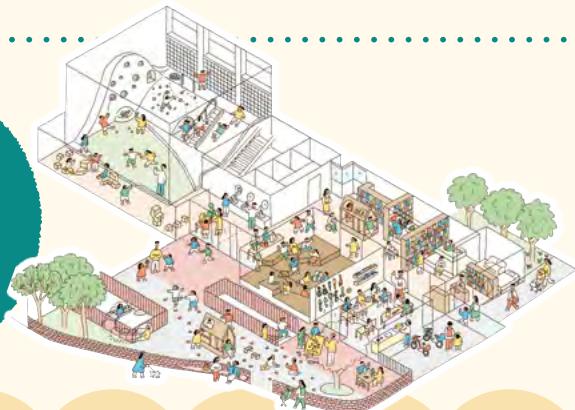
「天文をもっとみぢかに！」をモットーに、アウトリーチ活動を展開する「あすちか」。これまでに3回、アカデミックプログラムを担当し、子どもたちに宇宙の魅力を伝えてきた。「継続して参加する子も多いので、回ごとに『惑星』、『恒星』、『銀河・星雲』と扱うテーマを変えました。宇宙に存在する物体〈天体〉にはたくさんの種類があります。質量やなりたち、軌道もさまざま。天体ごとのドラマを知れば、『私はこれが好きかも』と、心を動かすものに出会う可能性も高まる。将来の『宇宙好き』をつくる種まきです」。

渦を巻いた銀河の形や、多彩な光がきらめく星雲の写真。芸術作品を眺めるように楽しめるのも宇宙の魅力。「科学にとどまらない、芸術、哲学などにも広がる宇宙の奥深さを伝えたい。映像鑑賞やカードゲーム、クイズ、工作など、多方面からの紹介を心がけています」。

いちばんのこだわりポイントは、難易度の設定。「小学校の授業よりもやや高度です。でも、身近な例をあげて天体の性質を紹介したり、選択式のクイズにしたり、理解しやすいように工夫しました」。たとえば、星雲と銀河とを分類する課題では、形状を身近なモノに喻え、その特徴が天文学的な分類とどう結びつくのかを話し合う。「正解・不正解は重要ではありません。体験をおして心の片隅にのこればいい。『そういうね、KuSuKuで聞いたぞ』といつかどこかで結びついで、宇宙フリークの仲間になってもらえたたら……。『天文をみぢかに』のモットーの達成です」。

想像を上回る子どもたちの前向きな反応に、「講師」の立場を忘れるとも。「楽しそうな姿を見て、『宇宙が好きだ』という原点を思い出します。私たちも楽しむことを忘れずに、天文学と天文教育に関わりたいと心を新たにします」。

京都大学学童保育所
京都大学
キッズコミュニティ
KuSuKu



講義内容の一例



宇宙の瓶詰をつくってみよう

瓶の中に綿をつめて水性絵の具で着色。雲のような星雲・銀河の世界が完成



オリジナルのプラネタリウムづくりに挑戦！

穴を開けた黒画用紙とカラーフィルムをつかって、色とりどりの恒星の世界を表現。「工作は、かならず試作品をつくり難易度を吟味しています」

創造性と理論を積み重ねて、ブロックで構想を形にしてみよう

●京大レゴ同好会

限られたパーツを組み合わせて、頭に思い描いたさまざまな世界をつくりだすブロック遊び。「自由に積み重ねてゆくのも楽しいですが、理論や計算、数学の知識をも駆使して、組み立て方を考える、パズル的な要素も魅力。無限大の可能性が詰まったブロック遊びの楽しさを知ってほしくて、子どもたち



に伝える機会を探していたところに、タイミングよく声がかかり、実現しました」。

プログラムでは、ブロックをつかった球体づくりに挑戦。直線で構成されるブロックで曲面をつくるには、工夫が必要。「ブロックを触りながら、まずは子どもたち自身で考えて挑戦してもらいました。その過程には、私たちもぶつかってきたたくさんの壁があります」。課題を見つけて考えて、ヒントをもとに再挑戦。用意したヒントの一つは、

「輪切り」。解説を聞きながら手を動かせるように設計図を用意。さらに、簡単な比の計算問題をつくり、計算からつかうブロックのサイズや数を導き出す方法も伝授した。「一見、『男の子向け』に思われるがちなブロック遊びですが、性別にかかわらず楽しめることを知ってほしい」。そう語るのは、プログラムにも参加した同好会の女性メンバー。



京大レゴ同好会がブロックで制作した京都大学百周年時計台記念館

「私の不安をよそに、期待以上に、女の子も男の子も楽しんでくれました」。

届けたかったのは試行錯誤の大切さ。「迷っていても、挑戦と失敗をなんどもくり返せば、解決へのヒントと出会える。知恵をしぼって、答えと出会えたときの驚きと悦びを体感してほしい。このプログラムを終えて、反省や欲が生まれました。私たちも試行錯誤を重ねて、もっと楽しめるプログラムを練っています。次回も期待してください」。

このように、KuSuKuは、子どもたちが安心して過ごせる場所であることはもちろん、育児中の研究者が研究に専念できる環境を支えることも大きな役割のひとつである。大学ならではの学びや出会いが生まれるこの場が、子どもたちと保護者のどちらにとっても心強い存在であり続けられるよう、3年目の歩みを進めていくつもりだ。



利用する保護者の声

自宅で過ごすと時間を持て余してしまうが、施設では刺激的な学びがありとてもよかった。

アカデミックプログラムで学んだことを家庭で実践してくれた。子どもはKuSuKuを大変気に入っていて長期休みの楽しみがひとつ増えた。

子がひとりで留守番するのが心配だったが、預かっていただけなので安心して仕事に打ち込めることができた。

子どもは大学を感じたようで、両親が関わる分野外にも興味をもつようになった。

身近だけれど、謎だらけ。自由気ままに生きるネコたちの 見る・感じる世界はどんな世界？

高木 佐保

白眉センター／人と社会の未来研究院 特定助教



たかぎ・さほ
同志社大学心理学部卒業。京都
大学大学院文学研究科博士後期
課程修了。麻布大学獣医学研究
科などをへて、2025年から現職。

心理学部に通う大学3回生のころ、保護猫を実家で受け入れることになりました。もともと動物は好きでしたが、いざ、いっしょに暮らしてみると、「なんてかわいいんだ！」。予測不能なネコの愛らしさに骨抜きにされてしまったのです。卒論のテーマを決める時期でしたから、「この子がなにを考えているのかを知りたい！」という気持ちから、動物の認知機能を分析し、進化の秘密に迫る比較認知科学の世界に足を踏み入れました。

ラットなどの実験動物の研究で学問のイロハを学んだあと、京都大学の文学研究科心理学専修に進学。決め手は、心理学専修で扱う動物種の幅広さです。そもそも京大にはありとあらゆる生きものの研究者がいます。他大学で「ネコの研究者です」というと不思議がられることも多いのですが、京大では「ああ、ネコか」。異端にならずにいられる居心地のよさがうれしかったです。

ネコたちは 世界をどう見ているのだろう

ネコ研究の本格的なスタートは、研究室の「ネコ好き」の仲間と「CAMP(Companion Animal Mind Project)-NYAN」を立ち上げたこと。研究室で、イヌを対象にすでに実績のある「CAMP-WAN」を参考に、ネコの心の動きを追いはじめました。

私の研究手法の特徴は、実験室ではなく、協力者のご自宅や猫カフェなど、ネコが暮らす場所に足を運ぶこと。ネコは慣れない環境では臆病になる動物。まさに、ことわざ「借りてきたネコ」の姿になってしまいます。普段どおりの姿を捉えるには、リラックスした環境での実験が欠かせません。飼い主の声や顔、同居するほかのネコの名前を認識しているのかという音声・言語の認知能力を実験して、ネコたちがこの世界をどう認識しているのかをあきらかにしたいのです。



ほかのネコの顔を認識しているのか、画面に写したネコへの反応を調査。扱いやすく、研究が進んでいなかったネコの新たな研究手法の開発の成果が認められ、大学院在籍時に京都大学総長賞を受賞。科学雑誌にも紹介されるなど、国内外から高い評価を得た

たとえば、ある実験では部屋のあちこちに設置したスピーカーから、飼い主が名前を呼ぶ音声を流します。ネコにとっては、「そこにいる」と認識したはずの飼い主の声が、つぎの瞬間、別の場所から聞こえてくる。このときに「驚き」の反応を見せれば、ネコが飼い主の場所を想像・認識していたと推測できます。ネコの反応を科学的に計測して、ネコの心に迫っています。

公私を支える2匹の大切な相棒

公私ともに大切な存在が、ともに暮らす2匹の猫「みかげ」と「くらま」。日々のお世話のなかに研究のヒントを見つけることも。ネコは人間の言葉を理解するといわれますが、私が「みかげ」と呼びかけると、2匹ともふり返ることがあります。研究者の性かもしれないが、そうしたふるまいを前にすると、「理解しているってほんとう？」と(笑)。



みかげ(左)とくらま(右)。神奈川の大学で勤めていたころに、保護猫だった2匹を迎えた。お世話に手間はかかる、独立した別の家族と同じ家で暮らしている感覚。子どもの世話のほうがたいへんです(笑)」

これまでに関わったネコの数は1,000を超えます。生きもの相手の実験は、こちらの思いどおりには進まないことが多い。実験を重ねてもなお、ネコのことはわかった気がしません(笑)。最近では、ほかのネコ科動物やヒトの乳児との発達過程や行動の比較も進めています。ネコの進化の過程に、認知機能を紐解く鍵があるはずだと、さらに掘り下げてゆきたいです。

大学院に進学するとき、両親から大反対されたんです。でも、人生は一度きり。そう思うと自分の心に従うばかりませんでした。自由気ままなネコの姿を見ていると、「こんなふうに生きたいな」と思います。心のままに邁進するからこそ、立ち向かえた困難もあります。みなさんも一度きりの人生、ネコのように思うままに、みずからの道を歩んでください。

interview
02

思い焦がれた地、アフリカが私のフィールド。 セネガルに充溢する熱気に魅せられて

阿毛香絵

アジア・アフリカ地域研究研究科 准教授



あもう・かえ
セネガル国立ダカール大学卒業
後、フランス国立社会科学高等
研究院博士課程修了。助教をへ
て、2025年から現職。

高校2年生のとき、バックパック一つを背負って、はじめての海外ひとり旅に出発。海外の冒險小説の世界にあこがれ、めざしたのはアフリカ。ですが、案の定両親は反対。攻防の末に行きついた先はインドでした。

両親の心配をよそに、ワクワクを胸いっぱいに抱えて降り立ったインド。バスと電車を乗り継いでヒンドゥー教の聖地を巡りました。自身の肉体と五感をとおして現地の空気にふれる楽しさに味を占めたのはこのとき。書籍では知り得ない、足を運んでこそ見られる光景の連続に心が躍りました。宗教とスピリチュアリティへの関心がふくらむなか、印度で出会ったのがイスラームです。

行動なくして道は拓けず。 「これだ！」と直感した方向に進む

渡航叶わなかったアフリカにもムスリムが多くいると知り、大学ではイスラームの研究をしようと決めました。「これだ！」と思ったら止められない猪突猛進型な性格は

いまも変わりません(笑)。

一口にアフリカといえど、そこは多種多様な文化がひしめく広大な大陸。漠然と研究地域を探りつづける日々、道が拓けたのは大學1回生のころ、偶然足を運んだアフリカンフェスティバルでの出会いがきっかけです。「アフリカで暮らすならセネガルがいちばん!」。留学生とのおしゃべりのなかで出たこの一言で、ぼんやりとしていた焦点が一気に定まり、セネガルへの渡航を即決。それから数か月後の夏に留学、はじめてセネガルの土を踏んだのは、大学2回生のときでした。そのとき出会った人や経験が忘れられず、3回生からは首都にあるダカール大学に編入。偶然の巡り合わせのおかげで、いつとはなしに自分の道が拓けていったのです。

当時のセネガルで目についたのは「なにか」に熱中する若者たちの姿。その正体は、イスラームの教えをもとに派生したスルーフィー教団(神秘主義の宗教コミュニティ)でした。若年層の人口割合が高いセネガルでは、信者にも、学生や、市場などでインフォーマルな仕事に従事する若い人たちが



セネガルでの調査。左の写真は、ムリッド教団での調査で信者たちと踊ったときのものです



セネガル留学中は、現地の友人とバンドを組みました。ボーカルが私です

解を生みがちです。彼らの言葉から読み取れる感情の機微や本質を捉えて、異なる文化圏の人たちに情報が正しく伝わるように翻訳することも研究の醍醐味です。

編入から8年をセネガルで、その後の10年をフランスと現地を行き来しつつ過ごしました。京都大学への着任も、一つひとつの経験を積み重ねるなかで引き寄せられた予想外の選択肢。高校生のころは、まさか自分が京大の教壇に立つとは夢にも思いませんでした(笑)。一貫して猪突猛進型ですが、ただ闇雲に進んできたわけではありません。好奇心を原動力に、自分の足で答えを探す。あとは運やタイミングが味方してくれます。

未知なこと、不可解なことほどおもしろい。他人の目は気にせず、直感を信じてわが道をゆけば、思いもかけなかった新たな世界への視野が拓けるはずです。



イラストレーターとしても活動中で、ブログでは家族との暮らしを漫画風に発信しています。ギニア出身の夫とはフランスで知り合い、現在は2人の娘とともに京都に移住して暮らしています

interview
03

新天地・舞鶴の海にひろがる、いのちのパノラマ。 地ごとに育まれた個性豊かな生きものとの出会い

邊見由美

フィールド科学教育研究センター 舞鶴水産実験所 助教



へんみ・ゆみ
高知大学大学院 博士後期課程修了。京都大学フィールド科学教育研究センター 舞鶴水産実験所特定研究員などをへて、2021年から現職。

舞鶴水産実験所にやってくるまでの二十数年間を四国で暮らしました。生まれは徳島県。川魚の養殖業を営む祖父母のそばで、山や川、生きものとふれあいながら幼少期を過ごしました。「小学校の同級生は、私を含めて2人」といえば、私の生まれ育った地域のどこかさがわかるかもしれません。

身近な職業の一つが教員だったという理由で、教育学部のある高知大学に進学。当たり前のように教師になるための勉強を進めていましたが、ゼミの先生との出会いで進路は一変。甲殻類を専門とする先生のもとで、その巣穴に共生する魚類の研究をはじめました。ずっと好きだった生きものに関われるうれしさを推進力に、先生に勧められるがままに論文を書いていくうちに、いつのまにか大学院進学につづく道を歩いていました(笑)。

新たなフィールドで出会った不思議なエビ

研究対象は、ハゼをはじめとする干潟の生きものや、それらが住み込む巣穴をつくる甲殻類です。高知県は、潮の満ち引きや、海岸の地形の影響で干潟が発達しやすい環境です。この地の利をいかした研究をしてきたので、潮汐が少なく、干潟の発達しにくい京都・舞鶴への着任は大きな決断。不安をかかえて舞鶴に来ることを覚えています。

でも、怖がらずに足を踏み入れてみると、どんどんと新しい世界がひろがりました。そのうちの一つが乗船調査です。舞鶴水産実験所が保有する教育研究船で海に出て、教員や学生が一丸となって底引き網を曳いたり、採泥するのです。そうして捕まえた無数の生物から、めぼしい生きものを探します。かならずしも発見があるとは限らず、時間もかかる地道な作業。そんななか発見したのが新種であるワカサスナモグリです。「高知

で親しんでいたスナモグリの仲間に、舞鶴でも出会えるなんて！」。そして、「あきらかに、高知で見たスナモグリとは違う形をしている！」と大興奮しました。

スキーバダイビングでの調査・捕獲も、舞鶴ではじめたことの一つです。これまで、若狭湾の泥中を対象に調査する甲殻類の研究者はいませんでした。私が調査することで、まだ知られていない生きものを発見できる。舞鶴の海の新たな姿を描けるはずです。

「巣穴に暮らす生きものなら 私に聞いて！」と胸をはれる日まで

海中はわからないことばかりで、調べれば調べるほど、不思議な生きものと出会います。網を曳いて捕獲した甲殻類のなかで、すぐに名前を同定できるのは数種類。そのたびに「海についてぜんぜん知らない！」と思いまして、生きものたちの多様さに圧倒されます。潜って採取したエビを見ると、細長い口

2025年に若狭湾で発見したワカサムラサキエビの雄個体(左)。雌個体(右)は2023年に新種として発見。脚の形が雌雄で異なる



舞鶴水産実験所の近海の浅い海底から発見した、新種ワカサスナモグリ。底引き網ではなく、採泥器をつかった調査の結果、新種発見につながった。細長い形の顎と、片腕だけが発達しているのが特徴

をしていたり、丸い口をしていたり、見た目はほとんど同じなのに、細部のパーツが違っています。こうした違いを手がかりにして、生きものたちが海中でどのように暮らしているのか、その暮らしぶりに迫りたいです。将来は、巣穴に暮らす生きものの生態をまとめた教科書がつくれるくらいに、成果をどんどん積み重ねることが目標です。

選択の岐路に立つと、どうしても足踏みしてしまいます。でも、いざ踏み込んでみると、思っているほど怖くはない。踏み込む力さえあれば、どうにかなる。あとは体力と、無理をしないこと。ときには、休む選択もしながら、好きなこと・ものが待つ世界に踏み込んでください。生きものの世界に飛び込んできてくれるなら、私も全力でサポートします。

interview
01人生にレシピなし。京大農学部だからこそ
見つけられた料理×科学のマリアージュ

平松紘実（平松サリー）さん

科学する料理研究家

静岡県 静岡県立沼津東高等学校 出身
農学部 卒業、農学研究科修士課程 修了

「科学する料理研究家」として、料理の「なぜ？」や調理のコツを科学の観点から解説・発信しています。食品科学のおもしろさに目覚めたのは大学の講義。一人暮らしをして自炊をはじめると、理屈っぽい私の頭にはたくさんの謎が浮かびました。たとえば、「卵が固まることと氷が固まることとは、どう違うのだろう？」「魚に塩を振つてしばらく置くのはなぜだろう？」「肉を加熱すると硬くなったりやわらかくなったりするのはなぜだろう？」。その答えが、食品科学のなかにあったのです。私をとりまく世界の謎を科学の力で解けることに知的好奇心をくすぐられ、図書館にこもって料理本や論文を読みあさり、自炊にいかす日々でした。

出版のきっかけは
書きためていた料理ブログ

研究者を夢見て、京大農学部に進学。自分の名前の残る仕事をしたくて、学術論文ならそれが叶うはずだと。でも、4回生になっ



大学時代にブログに載せていた料理。右下の料理は、「うま味の相乗効果」を狙ったもの。鶏肉のイノシン酸、トマトのグルタミン酸を組み合わせることで、うま味が何倍にも増して感じられます。左下は思い出深い下宿のキッチン。学生向けマンションで作業環境や収納が限られていたので、IHヒーターを買ったり、料理のためにさまざまな工夫をしていました

て研究がはじまると、「あれ？ 向いていないかも……」。飽き性の自覚のある私は、成果を出すまで何年も一つの事象に集中しつづけるスパンの長さに気が遠くなったりした（笑）。私の進むべき道じゃない、そう気づいたときは就職活動の時期は過ぎていました。2年半後の大学院修了までに、どうにか新たな針路を定めなければと……。

そんななか、先輩から「出版甲子園」を紹介されました。書籍の企画を募集し、商業出版につなぐコンテストです。私の学生時代は、個人ブログの全盛期。学んだ知識を応用したレシピや料理のコツをブログで紹介したら、想像以上によい反応がありました。科学の知識は一見むずかしそうで、とっ

つきにくいもの。でも、身近な〈食〉や料理と絡めれば、科学の話に耳を傾けてくれる。この実感をもとに、企画書を提出しました。なかなか現実逃避でしたが、トントン拍子で選考が進み、グランプリを受賞。このときの企画が初の著書『『おいしい』を科学して、レシピにしました。』（サンマーク出版）につながりました。

猪突猛進、
勢いの決断もときには大切

修了後は就職し、会社員と文筆業の二足のわらじを履く決意をしました。でも、新入社員としてあくせく働く5月、書籍の刊行を機に、取材や原稿依頼が舞い込んできたのです。出版後のこのタイミングを逃せば、次はないかもしれない。悩みに悩んで、退職と独立を決めました。決め手は、将来ふり返ったとき、どの道を「羨ましい」と感じるだろうかということ。会社員もつづける生活を選んだ自分が、退職して文筆業に邁進する自分を見たときに、きっと後悔するだろうと感じたんです。

ここ数年は、5歳と1歳の子どもの子育てに重心を置いていました。いまはすこしづつ仕事の比重を増やしている最中です。子育てをとおして、料理との付き合い方も変わりました。たとえば、一人のときは炒めものが楽ですが、子どもがいると、突然泣き出したりして料理を中断せざるをえないことも。こんなときは、材料を切って鍋に入れて煮込

んで終わりの料理が楽です。こうした新たな着眼点を、これから活動にいかすことが楽しみです。

長期的な視野で物ごとを考えて選択することにも憧れます。飽き性の私のこと、数年後も同じ興味をもっているかというと……（笑）。京大で学んだのは、みずからの領域外の世界がいかに広いかということ。学べば学ぶほど、知らないことの多さを痛感しました。変化の早い時代にふり回されることはありますが、勢いで独立を決めたときのように、この広い世界で目の前に集中しながら、精一杯に暮らしたいです。

column 著書が海外でも……

『おもしろい！ 料理の科学』（講談社）は、中国語繁体字に翻訳され、『不可思議的料理科學』として台湾の出版社から刊行されました。国外に向けての発信ができる機会があるとは思ってもみなかったので、とても驚いたとの同時にうれしかったです。



interview
02

自然にふれる「わくわく」を次世代にのこしたい。 大海に飛び込んだからこそ見つけた使命

近藤和歌子さん

京都市一般技術職（環境）職員

三重県四日市高等学校 出身

農学部卒業、農学研究科修士課程修了



自然豊かな三重県のまちが私のふるさと。幼少期の遊び相手はもっぱら、家の庭や空き地、ため池に生息する生きものたちでした。虫取りをしたり、ザリガニを捕まえたり、カメと遊んだりとわんぱくな子ども時代を過ごしました。

高校は家から片道1時間半の進学校に。入学当初から難関大学に照準を定める友人が多いなか、明確な目標をもてずに迎えた高校2年生の春。京都大学の大学案内に書かれた「知と自由への誘い」の言葉と出会った瞬間、「ここしかない！」と直感しました。一気に勉強モードに突入……といえ、一度きりの高校生活。学校行事や友人との時間も思いっきり楽しむため、一週間の学習計画を立て、メリハリを意識していました。

心底に眠る「好き」に目を向けて 出会ったのは同志たちのオアシス

農学部に進学後、なによりも夢中になったのが全国各地で行われる公開臨海実習。舞



沖縄での「サンゴ礁学サマースクール」で出会った黄色いフグと、岡山大学臨海実習での灯火採集。ライトを照らし、夜の海でしか見られない生きものを探します

鶴水産実験所の先生のもとで素潜りの技術を身につけ、海洋生物の生態を探るべく、長期休暇のたびに太平洋、日本海、瀬戸内海、沖縄と日本各地の海に飛び込みました。沖縄の海中に広がった艶やかな色の魚やサンゴ礁の絶景は忘れられません。ほかにも、京都大学瀬戸臨海実験所ちかくの白浜の海では、暖かい黒潮の影響で流れ込んだ熱帯・亜熱帯の生きものを発見。日本を囲む海でも、ひとたび潜れば、海域ごとに別世界が広がっている。知的探究心をくすぐられました。

研究室配属で海洋生物環境学分野を選択したのは、海や川の生きものたちへの憧憬が心に残っていたから。歳を重ねるにつれて「好き」を語れる場所は減ってしまいます。でも、この分野には、大人になってもなお、生きものへの「好き」であふれる人が集っている。まるでオアシスのようなこの場所で、童心に返ったような時間を過ごしました。海域ごとに生息する生きものが異なるように、似たも同士が集うのは人間社会も同じなのです。



大学院時代の調査手段は「船」。淀川河口から大阪湾奥まで断面調査をしたり、大和川の淡水が混じる堺浜で定点観測を実施。水中の酸素濃度、栄養塩濃度、炭素・窒素・リンの有機物濃度などを分析しました

人間も海の生きもの 大切なのは呼吸ができる場所

大学院では、大阪湾の水質環境を調査。船で沖合に出たり、採水器で海水をサンプリングします。夏の暑い季節、河口域の水深が深いところでは海水が硫黄臭く、臭いからも貧酸素化しているとわかります。このような水塊では、酸素が必要な魚などは生息できません。採取した海水を分析し、酸素を消費する物質を探りました。研究をとおして、海洋生物の生息環境と私たちの日々の営みとの深い結びつきを実感。芽生えた気持ちは、「自然環境保全につながる仕事がしたい」。

卒業後は、東京ガス株式会社に就職しました。仕事にも慣れてきたころ、やりがいを見いだすいっぽうで高層ビルがひしめく大都会の景色に窮屈さを感じるように……。自分らしく呼吸できる場所を求めて、頭に浮かんだのは、自然と都市が融合した京都のまち。ふたたび移り住むことを決意しました。

現在は京都市の環境職員として、公害対策や生物多様性の保全に取り組んでいます。

最近の思い出深い仕事は出前授業「地域生きもの探偵団」に携わったこと。小学生たちとともに学校林に足を延ばし、生きものを探します。ふだんなにげなく通り過ぎる場所も目を凝らしてみると、はじましての生きものが。「みつけた！」と我先に駆け寄ってくる姿や、解説に目を輝かせる子どもたちを見ていると、自然や生きものを大切にする気持ちが次世代につながってゆく喜びを感じます。自然に恵まれたふるさとが私を育んだように、生きものとふれあえる環境を現代の子どもたちに残すために力を尽くしたいです。

大人になればなるほど、「好き」を共有できる環境は貴重です。京大はマニアックなことに心血を注ぐ、一癖ある人たちが集まる場所。この大海に飛び込めば、きっと「同志」が見つかります。

column 休日のすごし方



4歳になる長男も最近は虫に興味津々。庭にレモンの鉢植えを置いてアオムシがアゲハチョウになるまで観察。2歳の長女もいっしょになって虫を探します。家族で植物園や動物園に出掛けることも。

すべての〈いのち〉に伴走者を。助産師が活躍する世界は、 とりのこされる〈いのち〉のない世界

岸畑聖月さん

株式会社 With Midwife CEO

香川県立高瀬高等学校 出身
京都大学大学院医学研究科人間健康科学専攻 修士課程 修了



医療の道を志した原体験は中学生での闘病経験。〈いのち〉を救う医療の使命に心打たれたいっぽうで、同じ時期、育児放棄され、部屋で一人泣いている赤ちゃんを見発見したのです。医療では救えない〈いのち〉がある現実を目の当たりにした、いまなお忘れられない光景です。

これ以上、悲しい〈いのち〉を見捨てておけない

〈いのち〉に寄り添う仕事を志して、地元・香川大学の医学部に進学。助産師の道を歩みはじめました。ただ同時に、医療の届かない場所で傷つく人たちに手を差し伸べるには、新しい仕組みや制度が必要だと痛感していました。ですので、入学当初から病院で働く以外の選択肢が念頭にありました。その一つが起業。「助産学と経営の両方を学べる」という欲張りな要望に合致する大学院を探して出会ったのが京都大学。「まさか私が京大に」と思いながら、猛勉強。京都の街に足

を踏み入れました。

大学院でみっちりと助産院の現状を学んだあと、関西の総合病院に就職。このときは10年をめどに助産師のスキルを磨いて、起業する算段。でも、産後うつに苦しむ方と接したり、中絶や虐待、自死などの心痛めるニュースでくわすと、この間にも傷をかかる人、救えないのちが増えているのだと……。待っていられなくなり、3年めの春に決心。そのご、2019年に株式会社 With Midwifeを設立しました。

生老病死のすべてに寄り添う 助産師の仕事

主力サービスの「THE CARE」は、企業専属の医療専門家が従業員の心身の健康や育児等を支援するプログラムです。日本の助産師は、多くが助産師・看護師・保健師の3つの資格を併有する専門家。妊娠・出産、メンタルヘルスや介護など、生老病死のすべてで力を発揮できます。助産師の活躍の場を増やしたい。そして、「助産師だから寄り添える〈いのち〉がある」。この矜持が私を動か



THE CAREの医療専門家は、研修をとおしてキャリア支援や労務の知識も会得。健康面はもちろん、キャリア選択にも考慮したサポートを提供



いまも月に数回、助産師として現場に立ちます。現場を知るからこそその気づきがサービスにいきるという側面もありますが、本音は「楽しくてやめられない」。命の誕生の瞬間にたずさわる喜びやありがたみは格別です

しています。

近年、産後・育児を支援する制度やサービスは充実していますが、そうした支援で関わるのは人生の一地点。THE CAREの助産師たちは、継続的に利用者と関わります。これまでの歩みを知るからこそ、利用者がつまずきそうな困難に先回りして声をかけ、「転ばぬ先の杖」を渡すような支援ができるのです。

理想としたのは、かつての日本で、地域に根づいて〈いのち〉の営みに寄り添ってきた「産婆さん」。「はじめまして」の人には伝えにくい悩みも、ずっと見守ってくれている人なら伝えられるかもしれない。産婆さんのように、みずからの人生を気にかけてくれる存在がいれば、社会からはじき出され、取り残される〈いのち〉は減るのではないか。こうした助産師との関係をまずは企業で実践したのがTHE CAREです。いずれは、どんな人の人生にも、専門家が伴走する、そんな社

会をつくりたい。そんな未来の実現にむけて、自治体などの企業以外への展開も思案中。その種蒔きに日本各地を飛び回っています。

京大で解放できた、 野心に燃える熱い自分

大学・大学院進学や起業、新たな挑戦に挑むときはいつも、より高い場所をめざしました。高く登るほど、志を同じくする仲間と出会えて、まるで上昇気流に乗ったかのように、夢に近づきやすくなる。世界各地から人材の集まる京大は、まさに上昇気流と出会える場所です。

京大にくる前の私は、熱い思いを秘めながらも、がんばる姿を冷やかされたり、周囲との温度差を気にするあまり、夢を語ることはほとんどなかったんです。でも、京大なら、本来の私のまでいられた。夢を「いいね」と言ってくれる仲間と語りあう京大での日々は、夢を見つづける力を私に授けてくれました。



大学時代は、下宿で流しそうめんをしたことも。京大生はなにごとも全力投球。突飛な私のアイデアに楽しんでのっかってくれた友人に感謝です

「私がやらねばだれがやる」で走らす筆。 孤軍奮闘の記者生活

砂川史佳さん(文学部3回生)

これに夢中! 「京都大学新聞」

京都大学の学生がつくる大学新聞。学内の施策や出来ごとを扱うニュース記事のほか、映画評や書評、展示評、特集企画などの幅広い内容で構成される。最大8,000部を月2回発行。大学構内7か所の販売ボックスにて1部100円で販売するほか、遠方の読者向けに定期購読も受け付けている。2025年に創刊100周年を迎えた。

京都大学新聞には、約20名の編集員が所属していますが、この春まで、参加する女性が私だけという状況もめずらしくありませんでした。

渾身の企画記事の一つが「大学生と月経」(①)。あるとき、文学部の女性トイレに立ち寄ると、無料の生理用品が置かれていました。気になって調べると、学生有志によるもの。「取材しないと」と記者魂に火がつき、企画を練りはじめました。

第一関門は編集会議。月経を体験したことのない編集員に、生理用品が無料で設置される意義を伝えることからはじめなければならない。とたんに気が重くなり、尻込みしていたとき、勇気をもらったのがほかの大学新聞の記事。「大学新聞に月経の記事を載せていいのだ」と編集会議にかけました。

これは、私が女性トイレを利用したから気がつき、生まれた企画です。「私にしか記事



①

にできないことがある」という自覚が芽生えたのはこのころ。女性は一人でも、「私が最後の砦」と思いながら活動をつづけてきました。

ほかにも、京都大学が2026年度入学者向けの特色入試から設置した理工系学部の「女性募集枠」の企画(②)には多くの反応がありました。設置を発表したとき、インターネット上では「逆差別だ」という批判が集中。なかには感情的な意見もあり、論理的に検討できる情報が不足していると感じました。憲法学や教育学の研究者、京都大学のほか、他大学や文科省にも取材しました。批判の多い時期で取

材先の選定は難航。それでも、自分と読者の「知りたい」に応えたくて取材をつづけました。一般紙では世間の注目に反してまとまつた記事は少ない。大学新聞ならではの切り口に関心が集まり、公開から1年以上たった現在も多くの反響があるのはなによりの励みです。

取材で外に飛びだすと、社会は「私だけ」で回るのではなくと痛感します。大学は、生まれや育ちの違う人たちが一同に会する場所。境遇が違えば、意見も異なる。他者への関心が私の筆を走らせます。どうすれば論理的に歩み寄れるのか、新聞をとおして考えながら、私ならではの視点を磨きつづけます。



第1回

幼なじみは〈運命の相手〉ってほんとう?

小説、漫画、映画などの物語に幼なじみの男女が登場すると、こう思いませんか。「この2人はきっと結ばれるのだろう」。2025年、新作アニメが放送された『赤毛のアン』シリーズ(ルーシー・モード・モンゴメリ)では、主人公のアンは幼なじみのギルバートと衝突を繰り返しながら関係を深め、最終的に結婚して幸せな家庭を築きます。『ドラえもん』では、のび太の未来にはしづかちゃんとの結婚が用意されていますし、NHK連続テレビ小説『あんぱん』では、モデルとなった実在の夫婦は幼なじみではないのに、劇中では幼なじみの設定でした。

恋愛関係の幼なじみをあえて書かない

しかし、こうした〈お約束〉に一石を投じた作品もあります。たとえば、個性的な四姉妹を描いた『若草物語』(ルイーザ・メイ・オルコット)では、作者が自己投影した作家志望の次女ジョーは幼なじみのローリーの求婚を断ります。それから、私が研究対象にしている『ハイジ』(ヨハンナ・シュピーリ)。日本ではアニメ版の知名度が高いですね。ハイジはヤギ飼いのペーターと仲よしですが、すくなくとも原作では、この2人が恋愛関係に発展する気配は一切ありません。シュピーリが書いたほかの小説でも、ヒロインは幼なじみのプロポーズを断ります。なぜそんな物語がくり返し書かれるのでしょうか?

文学にのこる「抵抗」の痕跡

そもそも「恋愛結婚」という考え方には、かなり新しいものです。家の意向に縛られた婚姻から解放され、好きな相手と結婚する。近代的な自由



川島 隆
文学研究科 教授

京都大学大学院文学研究科博士後期課程修了。2024年から現職。専門はフランツ・カフカ、ヨハンナ・シュピーリなど。2022年、カフカ『変身』の新訳を刊行。

恋愛ですね。18世紀に生まれ、爆発的な人気を博した恋愛小説というジャンルは、自由と主体性を重んじる近代的な人間観を表現するのにうってつけでした。とくに19世紀に入って、ロマンチックな恋愛の価値は劇的に向上していきます。

ただ、恋愛と結婚を一致させようとする価値觀には、抑圧的な側面もあります。「恋愛しなければいけない」、「好きな人と結婚できない私に価値はない」というプレッシャーはもはや呪いでしょし、とくに女性にとって、好きな人と結婚して家庭に入るのが最大の幸せだという考え方があり、これから職業を得て経済的に自立するのを阻む壁にもなる。そのことからして、19世紀後半の女性作家オルコットやシュピーリが自作であえて〈お約束〉を外したストーリーを展開させていることには、時代へのひそやかな抵抗の跡を垣間見ることができます。それに共鳴して勇気づけられたり、救われたりした読者もいるでしょう。そんな物語の力は、現代の作品にもきっと見つかるはずです。ぜひ探してみてください。





わたしの味方、 わたしの見方

立ち止まつたとき、
いつか読んだ・観た作品に
ふと背中を押されることがあります。
今号に登場いただいた方がたに、
高校生のみなさんに
手に取ってほしい作品をうかがいました。



『アルテ』

大久保 圭 著(コアミックス)

ルネサンス期のフィレンツェで、貴族に生まれた女性が画家をめざして奮闘する物語です。主人公アルテは「女性」であることから、男性ばかりの画家の世界ではなかなか受け入れられず、心ない言葉や不当な扱いを受けることもあります。それらを乗り越えようと夢を追い続けるアルテの姿に共感する場面が多くあり、「私もがんばろう」という気持ちになります。



邊見由美先生



阿毛香絵先生



西アフリカ圏の音楽／Kora Jazz Trio と Daara J

言語や文化にふれるには、音楽がおすすめ。Kora Jazz Trioは、ギニアとセネガル出身のアーティストがタッグを組んだグループです。アフリカ色溢れるジャズのサウンドに、伝統楽器のコラの音がマッチしてとにかくすばらしい！ アフリカ音楽にはじめてふれる人も、ジャズ好きの人にも、ぜひとも聞いてもらいたいイチオシのグループです。

Daara Jは、セネガルの超有名なヒップホップ・グループ。こちらもパワフルなサウンドとウォロフ語のラップが爽快。ダンスマジックやヒップホップ、レゲエが好きな人におすすめです。

音楽サブスクでも気軽に聴けます。どの曲もハズレなし！ ゼひセネガルのエネルギーに溢れる音楽世界にふれてみてください！



近藤和歌子さん



『知的生産の技術』

梅棹忠夫 著(岩波書店)

情報を得て思考し、新たな情報を生み出す「知的生産」についての考え方や技術について解説した本です。刊行から半世紀以上が経ち、知的生産をめぐる環境は随分変わりました。本の中で紹介される方法にはアナログ過ぎると感じられる部分もあります。しかし、基本的な考え方はいまも昔も変わりません。学生時代には大学での勉強方法の参考にし、独立してからも仕事のやり方を考える上で助けられています。時代や環境に合わせたアレンジは必要ですが、これからも折にふれて読み返したい1冊です。



平松紘実さん

『ジュゴンの上手なつかまえ方 海の歌姫を追いかけて』

市川光太郎 著(岩波書店)

『バイオロギング2 動物たちの知られざる世界を探る』

日本バイオロギング研究会 編(京都通信社)

生きものが好きな人、フィールドワークをしてみたい人、バイオロギングに興味のある人、生きものを追いかける研究者を知りたい人は、ぜひ手にとってみてください。専門書ではないのでとても読みやすいです。

『ジュゴンの上手なつかまえ方』は、私の所属していた研究室の先生が書かれた本です。大学院時代にジュゴンの調査に同行しましたが、まさに「ダーウィンが来た！」のような世界を垣間見ました。そのご、社会に出た私にとっては宝物のような時間でした。『バイオロギング2』にも京大の先生たちのお話が載っており、動物たちの意外な日常生活やそれを追いかける研究者の奮闘が書かれていて、とてもおもしろいです。



『変身』

フランツ・カフカ 著(新潮社)

ある朝突然、目を覚ますと巨大な毒虫に変身してしまった男のお話です。動物の研究において、「その動物種ならどう考えるだろうか？」という視点はとても大事です。『変身』には、「毒虫にならこんな感じだろうな」というようすがとてもリアルに描写されていておもしろいです。作者も毒虫になったことはないはずなのに、どうしてこんなに描写がリアルなんだろう。私もこのような想像力をもちたいな、と思います。

高木佐保先生



岸畑聖月さん



映画『LION／ライオン 25年目のただいま』

ガース・デイヴィス 監督

原作 サルー・ブライアリーの自伝

『A Long Way Home(遙かなる我が家へ)』

幼いころに家族と離れ、遠い国で育った青年が、自分の〈原点〉を探す旅に出ます。それは家族を探す物語であるとともに、「私とはなにか」というアイデンティティを問い合わせる過程でもあります。私自身、進路や人生の岐路に立ったびに〈自分の軸〉と向き合う時間が大切だと感じてきました。これから未来を選んでいく高校生のみなさんにも、自分のルーツや大切にしたい価値観を見つめるきっかけになる作品です。